

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録 エジプト日本科学技術大学（E-JUST）での集中講義と歴史探訪
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 112, No. 4, pp. 28-29
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 112, No. 4, pp. 28-29
発行日 / Pub. date	2015, 4



知財見聞録

エジプト日本科学技術大学(E-JUST)での集中講義と歴史探訪

東京工業大学 イノベーションマネジメント研究科 教授 田中 義敏

日本とエジプトの教育の懸け橋

2014年10月26日から11月1日まで、カイロに次ぐエジプト第2の都市、アレクサンドリアにあるエジプト日本科学技術大学(E-JUST)を訪問し、学内の教職員や学生に公開されているMonday Seminarにおける講演と経営工学専攻の集中講義を行ってきた。

ちょうど、E-JUSTが研究成果を特許出願するタイミングでもあったため、“Basic patents, or improvement patents? Let's challenge together to cutting-edge inventions!”と題した筆者の講演は、学長をはじめ上層部の関心も高く、時宜を得たようだ。

E-JUSTは、国際協力機構(JICA)が進めるプロジェクトの一つである。エジプトでは、授業料の無償化に端を発した教育のマスプロ化が進行しており、教育の質の低下が顕在化していた。

また、優秀な学生は、欧米をはじめとする大学や研究機関に進学し、卒業後も海外で就職する者が多く、人材の流出も大きな問題となっていた。

そのような状況下、エジプト政府から日本政府に対し、日本型の工学教育の特徴を活かした「少人数、大学院・研究中心、実践的かつ国際水準の教育提供」をコンセプトとする国立大学新設のための支援要請があり、2008年9月30日、E-JUST設立プロジェクトに署名がなされ、2009年に修士・博士課程の第一期生の受け入れが始まった。

フェーズ1の2014年1月31日まで、日本側から技術的指導、専門分野の講義提供等を通じた人材育成が遂行され、同年2月1日からはフェーズ2として5年計画の事業が継続している。

日本からは、九州大学、早稲田大学、東京工業大学、京都大学が本プロジェクトに参加しており、各大学から長期・短期の専門家が派遣され、現地での教育に貢献している。筆者は短期の専門家として2度目の訪問であった。

筆者の集中講義は経営工学専攻の講義の一部である。ここに参加したのは経営工学の修士・博士課程の学生たち。少数精鋭を狙った大学院であるが故、参加者の中には既に助手クラスの者もいた。ディスカッションを中心とした授業を行い、宿題もたくさん出したが、皆、実に真面目に取り組んでくれた。

エジプトでの知的財産の普及・啓発はまだこれからであるが、2012年、E-JUST内に産学連携の推進や特許管理、地域貢献を目的としたCINTECH(Center of Innovative Technology)というオフィスが設置され、意欲的な活動を行っている。特許管理も重要な役割として認識されており、今後、各技術分野における研究成果の特許出願や権利化の進展が期待されている。

エジプト特許庁は1951年の法律132号によって設立され、1971年以降は科学技術アカデミーの組織として位置づけられている。

2002年3月6日には新法が発効し、実用新案、半導体レイアウトデザイン、秘密情報の保護制度が追加導入された。現在同庁では、エジプトにおける知的財産権制度の普及を図るとともに、庁組織の近代化、職員の増員(現職員数:約150人)、知財情報の活用を推進すべく取り組みが行われている。

ここ数年の特許出願状況は、年間総数が約2000件超、そのうち、エジプト人によるものは約600件超だという。

観光名所の宝庫、エジプト

講演および集中講義を終えた後、E-JUSTのEltawil先生の案内によって、カイロまで歴史探訪に出掛けた。

アレクサンドリアからカイロまでは車で3、4時間。当日はホテルを6時30分に出発して戻ったのは23時ごろというハードスケジュールだった。



Monday Seminarでの講演

まず、ギザのピラミッドに向かった。クフ王、カフラー王、メンカウラー王のピラミッドが有名である。これらに隣接して、女王のための小さな3つのピラミッドも残っている。

今から4500年も前に建造されたものだが、考古学の世界ではいまだ多くの謎に満ちているという。そのうちの一つに、「ピラミッドは『墓』か?」というものがある。現地のガイドによれば、「ピラミッドは、ファラオのミイラを埋葬した墓で、魂がよみがえるための新たな魂の通り道も設けられている」とのことだが、諸説あるようだ。

カフラー王のピラミッドから約500mは歩いたであろうか(見た目ではすぐそこだが、実際にはかなり遠距離だと感じた)、スフィンクスがピラミッドを守るように居座っている。頭が人間、身体はライオンを模した聖獣である。

スフィンクスは、ピラミッドの正面入り口側に陣取って、敵の進入路を塞いでいるのだという。

次の目的地である考古学博物館では外庭で現地観光客の子どもと記念撮影したが、館内は撮影禁止であったため掲載できる写真がない。短時間ではあったものの、ツタンカーメンの黄金のマスクと歴代ファラオや女王のミイラの実物をしっかり観察してきた。

次に向かったのはガーマ・ムハンマド・アリ。複数のドーム状の屋根と、それよりもはるかに高くそびえるミナレット（イスラム教の儀礼として1日5回の礼拝を呼びかける塔）はオスマン朝様式の影響らしい。筆者もしばしばひざまずき、祈りを捧げてきた。

今回の歴史探訪の締めは、14世紀後半から始まったハーン・ハリリーという旧市街の市場だった。

ここには金属細工、革製品、木箱等、いろいろな工芸品を売る店が集まっており、筆者も幾つか土産品を買った。……とこの時、既に時刻は19時を回っていた。疲れも出て腹も空いたせいか、古造りのレストランで食べたモロヘイヤスープがおいしかった。

一日限りのカイロ歴史探訪はあっという間だったが、後でガイドブックを見て驚いた。見るべき観光名所の多いこと！ それはエジプトの長い歴史の証拠といえるだろう。

エジプトでは、古くなったものを壊さずそのまま残し、新しいものをつくる場合、何もない場所を探すのだという。すなわち、歴史の積み重ねが蓄積するよう、すべてが残されていくのである。スクラップ&ビルドではない。

エジプトを語るには、相当長い時間をかけた観察が必要なようだ。



スフィンクスとその奥にはクフ王のピラミッド



筆者が掴んでいるのはカフラー王のピラミッド



巨大な寺院のガーマ・ムハンマド・アリ



ハーン・ハリリーという旧市街の市場



モロヘイヤスープ